東京都市大学共通教育部紀要　抜刷　2021 Vol.14

The Beautiful War in *Jacob's Room* — Virginia Woolf in the Pocket —

美しい戦争の『ジェイコブの部屋』
—ポケットのなかのヴァージニア・ウルフ—

秋山 義典

Journal of Liberal Arts and Sciences at Tokyo City University Vol.14, 2021

美しい戦争の『ジェイコブの部屋』

― ポケットのなかのヴァージニア・ウルフ―

外国語共通教育センター　秋山 義典

１．だれが「ジェーイコーブ（Ja-cob！）」の名前を呼ぶのか

『ジェイコブの部屋』に目を走らせると、この作品の主人公が行方不明のままクライマックスを迎える。ジェイコブはどこに消えたのか。主人公は消えたままで姿をみせない。それはどういう状況なのか。最後の場面で主人公がみえない。ジェイコブのいない部屋とは、読者が最後に癒されるような安堵感の正反対の感情に向かわせる。それは「回復不可能な喪失感(irrecoverable loss)」（タミー・クロウェル）といえるだろう。(1)

この独特の結末とはどこからうまれるのだろう。その理由のひとつは、物語が主人公ジェイコブを洞察しながらもことばを連ねようとはしないからであろう。結末を書き残さないだけでなくその途中でもジェイコブはどこかに消える。モダニスト作家ヴァージニア・ウルフの複雑な技法が潜んでいるのかもしれない。ではその感覚をそのままに放置しておくのではなくもう一度、この小説が何を意図的に描こうとしないのかを探しながら、この独特の喪失感の源泉を探り出してみたいと思う。

『ジェイコブの部屋』の冒頭を振り返ってみよう。説明抜きに人々のなまえ、多くの名詞や地名、連なるように登場する。どんな場面で、だれがなにをしているのか、よくわからないまま、いきなり「ジェーイコーブ！ジェーイコーブ！（Ja-cob ！ Ja-cob ！）」（４）と叫ぶ声が聞こえる。このなまえを２回繰りかえされる。その声が聞こえてくる。印象に残る小説の冒頭である。ジェイコブは、彼女の息子である。彼女とは、母親のベティ・フランダースである。この「ジェーイコーブ！ジェーイコーブ！」の叫び声は、母親が案じて大声をあげている。「ジェーイコーブ」とは一人息子のなまえで

あり、彼のなまえをさけんでいるのだ。読者はこんな風に解釈しているのではないだろうか。それは明らかに誤読している。母親が呼んでいるのはコーンウォールの海岸に、息子たちと遊びにきているのだ。（ジェイコブ、アーチャーの息子である。）ジェイコブの名前を大声で呼んでいるのは、長男のアーチャーだとわかる。母親の声ではない。「あのつまらなそうにしている坊やはどこかしら？あの子の姿がみえない。走って見つけて すぐに来るように言ってきて "（“Where is that tiresome little boy?” "I don't see him. Run and find him. Tell him to come at once."）」[(1)]と息子たちに声をかけてジェイコブを探していた。よくみるとジェイコブは海辺で、カニと戯れているだけだ。どこかに消えていったわけではない。それでも、母親ベティは、なにか感じ取りすぐに戻ってくるように、と声をかける。幼いジェイコブがどこかにきえてしまうのを予感するかのように。

母親のベティは息子たちにかこまれて満足な生活を送っている。いやそれには遠く及ばない。フランダース夫人ともよばれるベティはこのように「結婚とは要塞であるとすると、未亡人とは野原で孤独に迷い、石を拾い金色の藁を拾うような孤独で誰からも守られることのない可哀想な女性」である。フランダース夫人は２年前に未亡人になった。二人の息子を育てている。そういう事情を背景に考えると、この場面には、ベティを包む特別な空気が漂う。夫に先立たれて、やりきれないような孤独に直面する。「ジェーイコーブ！ジェーイコーブ！」と行方不明になったかのような子供を必死で探す声が聞こえるのである。その声は自分の身から、次々と大切なものが無理やり引き離されてしまう不安やさびしさのように聞こえるかもしれない。その声は家族に囲まれた幸せな女性がことばを詰まらせながらつぶやく、ひとりになっていく孤独の序章を暗示してるのかもしれない。

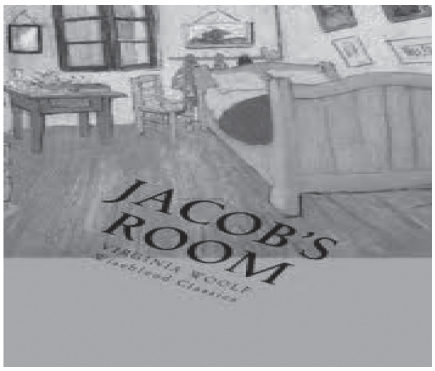
小説の最後に、息子全員を失う母親の姿をだれが想像できるのだろうか。その一方、この小説冒頭の幼いジェイコブの様子を追いかける姿をみるだけでは、ベティの悲しさは、ストレートには伝わってこない。家族はスカーボロに暮らし、未亡人となり、夫の思い出を大切にしている。尊敬するフロイド牧師をこころのどこかで想いながらも再婚する気持ちはない。３人の息子たちに囲まれて、孤独ではない人生を送っている、前半は、幸せな日々を過ごしているのが、母親ベティだろうか。そのようにみるのは、自然な見方か

もしれない。

ところで『ジェイコブの部屋』を最後まで読み進めたとき、ジェイコブはこの世界から姿を消している。ベティとともに、ジェイコブの部屋のなかをながめてみるとき、机や書物がそのままおかれているが、かれの姿がみえない。そのとき、だれの口から語られることがないのに、ベティの息子、ジェイコブが亡くなったのかしれないという懐疑が脳裏を横切るのである。友人のボナミーがベティとジェイコブの部屋に入って母親は「これをどうすれば良いのですか ボナミーさん？（What am I to do with these, Mr. Bonamy?）」と聞くと、ベティは「ジェイコブの古靴を一足差し出した（She held out a pair of Jacob's old shoes）」というありふれた愛用の一品をさりげなく、感情を押し殺したような言い方で息子が亡くなったことが間接的に言及される。そのやり取りから、ジェイコブの不在がじんわりと伝わってくる。冒頭のイギリス南部でビーチをおとずれたフランダース一家の休暇のひとときを思い出すと、最後の取り残されたベティの悲しさが余計に感じられるのである。それでは、なにがかけがえのない平和な家族の一員である息子（たち）のいのちをうばいとったのだろうか。それは印象派のスケッチ画のジェイコブのようである。かれの姿がかすかに見えてくる。その焦点ははっきりとはジェイコブの姿を映し出さない。第一次世界大戦が開始される社会の変化が生じた。ところが開戦を現実的に示唆するような物語の断片はみえていない。『ジェイコブの部屋』を読んでいると、この作品の主人公が行方不明のまま終わっている。ジェイコブはどこに消えたのか。主人公は消えたままで姿をみせない。それはどういう状況なのか。最後の場面で主人公がみえない。ジェイコブのいない部屋には、最初からジェイコブはいなかったのかもしれない。再会の期待に胸躍らせる間もなくあっけなくこの物語は終わる。これがこの小説の特徴である。

２．ジェイコブと部屋に残された小物

ジェイコブは姿のみえない主人公であり、加えて影の薄い人物であるともいえる。というのは人物の輪郭が希薄な印象が付きまとう。ブルーマー先生の家で昼食会が開かれたときに、ケンブリッジの若者がホメーロスやシェイクスピアやエリザベス朝の劇作家を読んでいないのを、憤慨するだけでなく、自分たちは老人の世界によって、抑圧されていると言っている。だから「I am what I am, and intend to be it(私は私であり、そういう自分であるつもりです)(28) というジェイコブの言葉がある。「He was a young man of substance」(28) ともいわれる。ジェイコブは仲間の学生たちにむかって反撃しているところであるが、同時に自分が「中身（substance）」がある若者であると主張してみせるがその表現は、かえって彼の存在の稀薄さを暗示しているようにも見える。かれは同時に影響を受けやすい（impressionable）若者である (28)。語り手がジェイコブは自分でかたちをつくらなければ、どんな形もできないだろう（there will be no form in the world unless Jacob makes one for himself）(28) と付け加えているのだ。存在感のある人物からは、ほど遠い影のうすい若者だ。[2]



ジェイコブがいた部屋の様子『ジェイコブの部屋』の表紙より [3]

ジェイコブの部屋はどうだろうか。部屋のなかを書きとめる場面があり、かれの部屋にはさまざまなものが置かれている。その部屋に置かれたさまざまなものを通じて、かれがこの部屋の中に実在したのが伝えられる。

Jacob's room had a round table and two low chairs. There were yellow flags in a jar on the mantelpiece; a photograph of his mother; cards from societies with little raised crescents, coats of arms, and initials; notes and pipes; on the table lay paper ruled with a red margin…Listless is the air in an empty room, just swelling the curtain; the flowers in the jar shift. One fibre in the wicker arm-chair creaks, though no one sits there(31).

ジェイコブの部屋には丸いテーブルと低い椅子が二つあった。マントルピースの上には壺に入った黄色い旗、彼の母親の写真、小さな紋章、イニシャルが描かれた学会からのカード、ノートやパイプ、テーブルの上には赤い余白で罫線が引かれた紙が置かれていた。…誰もいない部屋の空気が カーテンを膨らませて 壺の花がゆらゆらしている 誰も座っていないのに、籐の肘掛け椅子の繊維の一本がきしむのである。

ジェイコブの部屋には、沈黙が流れる。テーブルの上には彼の愛用の小物がきちんとおかれている。あたかもジェイコブが先ほどまでテーブル前にすわっていたかのように。ジェイコブが部屋の中で確実に生きていたという実感は、どうだろうか。かれがここにいた形跡はたしかにあるが、かれの実在感は、どこまでも曖昧である。それは「そこには誰もすわっていない」、つかみどころとない、ジェイコブのすがたではないか。かれは宙にただよっていないだろうか。一方確実に描写されているものがある。それは、「旗、写真、カード」などなどモノだけはかれの部屋にはっきりとした輪郭の中に残されている。部屋の中に確かにあるのは、ジェイコブが使ったものだけであり、使ったモノは確実に描写されている。この点を反対からみると、つかみどころないジェイコブにたどり着くために、「黄色い旗、彼の母親の写真、小さな紋章」の小物がかれのなにかを伝える記念のモノになっている。ジェイコブはここにいない。しかしそれらはジェイコブに代わって彼自身を映し出す代用品（proxies）でもある。このような代用品の並列がさらにジェイコブの不在を浮き彫りにしている。

３．上手に文章が書けないフロリンダ

『ジェイコブの部屋』は若いジェイコブの成長を描く教養小説である[(4)]。ジェイコブはしだいに少年から青年へと成長していく。ジェイコブは、青年期から成人期へと直線的に展開していると思いがちであるが、彼が入隊したのかはっきりしないまま、小説の最後まで行方不明になりつつも、その途中からでも、ジェイコブは実在の人物として描かれてところも多々ある。しかしそういっても物語のなかでジェイコブの消息不明を、現在から過去へ繰り返し予感させる場面は何度もあるように思える。ジェイコブの姿が見えなくなるのは、しばしば彼以外の人物の視点を通じて描かれるからでもある。ロンドンでの人々との交流を広げていく中で、ジェイコブは、複数の女性と付き合うようになっていくが、その中のひとりが、フロリンダである。ロンドンで弁護士修行をはじめたジェイコブだが、一瞬、不可思議な態度をみせて、ジェイコブをまどわせるフロリンダに徐々に魅かれるようになる。フロリンダは、この中で「フロリンダ」としか呼ばれない。彼女は若い女性でジェイコブは、彼女とロマンティックな関係を結ぶ。「彼女は苗字がなく、両親のことで、彼女によれば、彼女の父が埋葬されている墓石の下に写真が残っているだけだったという（she was without a surname, and for parents had only the photograph of a tombstone beneath which, she said, her father lay buried)」(65)。彼女の書く手紙は、スペルが読めないくらい下手な字で、書かれていることも子どもじみていたが、その手紙には、涙のあとが残っていて、神への信仰が触れられていた。自分の感情に正直な女性であった。彼女が別の男性とグリーク通りを歩いているのをジェイコブは目撃した。ジェイコブはフロリンダとは真剣に恋愛ができない。彼女にはジェイコブのような教養は持ち合わせていないし、普通の職業にはついていない。手紙に彼女は上手な字が書けない。上手に字を書けるかどうかが、その人物の特徴の一端を示唆しているのかもしれない。彼女はジェイコブとは対照的な人物であるが、同時に誠実で正直なキャラクターに惹かれたジェイコブは彼女と肉体関係をもつようになる。母親はジェイコブと離れて暮らすようになると、ジェイコブと手紙のやり取りをはじめる。母親が予感したように、彼女は息子のことを心配するようになる。

４．きれいな字を書くクレアラ

他者のさまざまなことばの中からジェイコブの一回り成長した姿は推測できるようになる。かれはケンブリッジで勉強する。大学で友人に恵まれて感情が高まる生活を送る。他者の眼という点では、友人のティミー・デュラントとリチャード・ボナミーのふたりはジェイコブに重要な意味をもつ。頭脳明晰なジェイコブはヨーロッパ古典に関心をいだく。現代の文学よりも、古典に熱い視線をむけていた。とくにギリシア神話にかき立てられる。ティミの地元に遊びにでかけたとき彼の家族と交流した。そこでティミの母親がジェイコブに関心の目を向けた。ティミの妹のクレアラ（Clara）とジェイコブはヨットで海に出かけたりする。ゆっくりとした時間の中で彼女との恋愛関係を加速させていく。ジェイコブは２２歳になった。ケンブリッジからロンドン引っ越したかれは大英博物館で研究し、西洋古典の奥深さを実感する。なかでもリチャード・ボナミーとの交流からジェイコブは、自分を成長させていく。ここでふたりの女性がしのぎを削る。ジェイコブという男性をめぐってティミー・デュラントの妹、クレアラと出生の秘密をもつ謎の女性フロリンダとの対決が暗示される。

クレアラは、「レッツ氏の日記帳 (Mr. Letts Diary)」に「わたしはジェイコブ・フランダースが好き (I like Jacob Flanders)」と書き残すが、「しかしながら、それは若い女性の言葉に過ぎず、ひとを愛するひともいれば、愛することをおさえる人もいる。彼女はその瞬間が永遠に続くことを願っていた、あの七月の朝のように正確に（But then, this is only a young woman's language, one, too, who loves, or refrains from loving. She wished the moment to continue for ever precisely as it was that July morning）」(59) といわれる。クレアラという女性がいかに純粋にジェイコブしか見えなくなるのが伝わってくる。彼によれば、クレアラが書き下ろす手紙は、子どもぽい内容だったが、日記帳に自分の抑えられないきもちを書き残す行為もひたむきなその姿勢からも、中流階級の洗練された家族のすがたが、クレアラのことばの背後に浮かんでくるかのようである。クレアラは子どもぽい文章しか書けないが、彼女の綴り字を追うにあたって問題はないが、フロリンダはそうはいか

ない。彼女の綴りはとんでもなくあきれる。判読できないくらい嫌気がさすのだ。

> Clara Durrant's letters were those of a child. Florinda--the impediment between Florinda and her pen was something impassable. Fancy a butterfly, gnat, or other winged insect, attached to a twig which, clogged with mud, it rolls across a page. Her spelling was abominable(80).

クララ・デュラントの手紙は 子どもの手紙だった。 フロリンダはどうか -- フロリンダと彼女のペンの間にある障害は、何か克服し難いものだった。蝶やブヨなどの羽のある虫が、泥で詰まった小枝にくっついて、ページを横切って転がっていく様子を想像してみてほしい。彼女の綴りはとんでもなくひどいものだった。

ジェイコブはクララとフロリンダの綴り字を比べている。この二人の女性の字を比べてみるのは女性を軽蔑するポーズをみせるジェイコブの特徴をよく示している。可憐なクララと清楚ではなさそうなフロリンダの正反対の女性に引き付けられるからである。クララの手紙は子どもぽいと文句をつける。一方フロリンダの綴りには判読できないほど下手な字だと言い放つ。「虫が小枝にくっついて」いるような字。ふたりの女性の綴りの違いは天地の差がつくほどだったと強調する。ではきれいな字で日記をつけるクララにジェイコブは熱い視線をむけるようになり、字の下手なフロリンダの存在はどうでもよいと思っているのだろうか。

純粋で、ひたむきな少女のようなクレアラと感情的で、教養のないそれでも性的な魅力にあふれたフロリンダの対比は、興味深いが、クレアラとフロリンダという対照的な女性がジェイコブの目のまえに登場しているにもかかわらず、フロリンダが自分を「純潔（virginity）」と呼んでいる点である。それをジェイコブは強調する。家族から見捨てられて、手紙の文章もうまく書けない。悲しそうな目をしながら、子どもぽいくちびるで「たいていの女性が純潔について話す以上にフロリンダはそれについて話した。前の晩にはじめてそれを喪失したばかりだった。あるいはそれを胸の奥深くに大切にし

まっていた（She talked more about virginity than women mostly do; and had lost it only the night before, or cherished it beyond the heart in her breast, according to the man she talked to）」と言われる（65）。フロリンダはどうして「純潔」にこだわりを見せているのか。昨晩「純潔」を失いそれを大切にしまっておくとはどういう意味なのだろう。ジェイコブにほかの男性と歩いているのを目撃されたにしても、彼女を「純潔」と言い続ける点が気になる。ジェイコブはその反対に「わいせつ (indecency)」を考えている。ケンブリッジで文学のわいせつについて論文を書いている。

> Jacob took her word for it that she was chaste. She prattled, sitting by the fireside, of famous painters. The tomb of her father was mentioned. Wild and frail and beautiful she looked, and thus the women of the Greeks were, Jacob thought; and this was life; and himself a man and Florinda chaste(66).

ジェイコブは 純潔であるというフロリンダの言葉を信じた。 彼女は火のそばに座って 有名な画家の話をした。 彼女の父の墓の話をした。 彼女は野性的で虚弱で美しく見えたが、ギリシアの女性はそうであった、とジェイコブは考えていた。これが人生である。自分は男性であり、フロリンダは純潔なのである。

フロリンダは「純潔（chaste）」を失っていないのであると強調される。クレアラのような女性は、それを失うことなく、それを守り通しているのは、納得がいくと思われるが、スチュアート叔母さんが仕切る薄汚い「下宿小屋 lodging house」で働いているフロリンダが「純潔」を強調する言い方には、セクシュアルな彼女を擁護したいとしても、ずいぶん不自然なこじつけがみえなくない。ジェイコブは、彼女にシェリーの詩集を貸りて読んでほしいというが、フロリンダは詩集のページをめくってみるが、楽しそうに読めないまま、退屈でしょうがない。教養のある男性が無教養な娼婦に入れあげる男女の組み合わせはかなり異様な印象である。さてこのアンバランスな均衡を慎重にマークしてみたい。一見「純潔」とは遠い女性になぜ「純潔」をあて

はめようとするのだろうか。純化ならざるものを純化しようとする空気の影響が色濃く反映されているのではないだろうか。

5．「純潔」を要求する国家

ここに戦火に見舞われたイギリス国家が戦争を前にして緊張した社会の空気が漂う。若いジェイコブもこの雰囲気を意識しているのではないだろうか。このような社会の雰囲気が暗示されている。この社会の空気を反映するように、英国国民の責務のひとつとして、未婚の女性は守るべきものがあった。それは純潔を失ってはいけないという主張であり、こうした検閲が広まった。それをセシリア・マーシークは、この小説の「わいせつの倫理（the Ethics of Indecency）」と呼んでいる。たとえばマーシークによれば、ウイリアム・コーテの『博愛のロマンス *A Romance of Philanthropy*』(1916) では、若い男性が戦闘に向かうなかで愛国心をもって国の名誉を汚すことがないように未婚の女性は「純潔」を失わずに守り続けるのが望ましいといわれる。これは社会純化運動の一端を示している。英国が戦争に参加してから 3 日後に英国国土防衛法 (The Defence of the Realm Act) が可決された。1914 年 11 月 27 日に国防と統合法に取って代わられた。1915 年にさらに 2 つの修正が行われた。

G. R.

DEFENCE OF THE REALM ACT

NOTICE.

A stoppage of work has taken place in the West Cumberland Iron Ore Mines. It is suggested that the cause of the strike is that the Government by calling up young Iron Ore Miners born in 1899 have broken an undertaking. It was announced to the men's representatives in January last that in view of the paramount need of men all undertakings with regard to recruitment were cancelled and that the undertaking was cancelled with the rest.

In the circumstances therefore the strike is nothing else than a protest against the calling to the Colours of young men in the highest medical category of fitness and is thus a claim for exceptional treatment which is not made by any other class of citizens.

It is difficult to believe that at any time the Cumberland Iron Ore Miners would strike as a protest against the recruitment of such men. It is impossible to believe that they will persist in striking at the time of all others.

The Government will not recognise any claim for the special treatment of these men and they will not permit the strike to continue. They call therefore upon all legal citizens to resume work immediately and they give notice that all persons who incite to any stoppage of work on war material or who do any act calculated or likely to contest the production of such material are guilty of an offence under the Defence of the Realm Regulations the penalty for which is penal servitude for life or such less punishment as may be awarded. If work is not resumed the Government will not hesitate immediately to put this power into operation.

ISSUED BY THE MINISTRY OF MUNITIONS OF WAR.

英国国土防衛法 (The Defence of the Realm Act) の通達を告知する張り紙 (5)

この法律を運用するために、約 260 の個別の国土防衛法が導入され、検閲と異議申し立ての管理を超えて、経済と労働の管理、アルコール消費に関する社会統制、食品経済、さらには性病の封じ込めに関する規制が含まれていた。性病の流行もこの法律の重要な観点であり、公的な空間での売春婦の活動も含まれていた。手紙も検閲された。その点から検閲官の視線を回避して、ウルフのこの小説もこの国土防衛法の規制を格別意識していた。公共の空間における女性の活動が問題になり、解決策を模索した。フロリンダをどのように描写するのかという表現の自由もこの規制に抵触するのではないかと危惧されていた[(6)]。一方クレアラのような中流階級の女性も「純潔」を守ることが、求められて、国家を戦争で勝利に導くという社会の空気が流れる。その社会の雰囲気が見えない圧力になって背後に潜んでいる。この背後には、戦争の暗い影が潜んでいるのを否定することはできない。ジェイコブがフロリンダに「純潔」を無理やり強要しようとは思われないが、「純潔」ということばに暗にこだわりを見せるのはこのような戦争を意識した社会への影響があったのではないだろうか。

6．ポケットに手を入れるジェイコブ

ヴァージニア・ウルフが『ジェイコブの部屋』にとりかかったのが1920年といわれる。21 年に脱稿。22 年に出版された。時代設定は第一次世界大戦以前から開戦後あたりに置かれているが、その時代を舞台にした戦争を描いた小説とは言えないのは、あからさまにそれを正面から描いていないからである。その理由のひとつとして戦争を批判的であれ、好意的であれ、そのものを描くのが簡単ではなかったと推測できるかもしれない。英国社会の中の制度上の圧力が加わった兆しがみられる。しかしここで注目したいのは戦争的なものとはほとんど結びつかないものである。それらはジェイコブの愛用の小物である。その小物がこの小説の文章にくみこまれている、そのひとつが「ポケット」に囲まれた小物である。

"My mother said something about going to Harrogate," he said with a little annoyance, feeling the pocket where he kept his letters (30).

「母がハロゲートに行くと何か言っていた」と、彼は手紙を入れているポケットを感じながら、少し困ったように言った。

ジェイコブのポケットの中の中身はどんなものが入っているのか。ふつうはどうでもいいものがその中には入っているが、この青年のポケットの中には、「かれの手紙」が押し込まれている。あるいは、「両手」を隠すためにポケットが使われる。「かれの手紙」は、ポケットの中で傷つけられないように守られているかのようだ。ポケットの中に入っているものが、どれもジェイコブにとってまったく意味のないものではなさそうである。

「手紙」は、『ジェイコブの部屋』ではたくさんの人物が何度も利用するコミュニケーション手段であり、ジェイコブだけにとどまらず、母親のベティも手紙を書き下して、フロリンダに送られた恋文もあり、神父フロイド氏が書きあげた手紙も登場する。「手紙」に込められた象徴的な意味を見過ごすことはできない。

ポケットには手紙が入っている。ポケットの中を探るのは指の役割であろう。手の指がポケットの中に手紙を入れる。かれが無意識のうちに手をそのなかにこっそり入れたのも、どこか意味ありげでもある。それは、2章でバーフィット大佐がベティに逢いにいく場面である。５０歳を過ぎたバーフィット大佐は戦争で身体が少し不自由で左指を２本失っている。

Wednesday was Captain Barfoot's day. He dressed himself very neatly in blue serge, took his rubber-shod stick--for he was lame and wanted two fingers on the left hand, having served his country--（18）.

水曜日はバーフット大佐の日だった。青の軍曹に身を包み ゴム靴の杖を持っていた。 彼は足が不自由で左手の指２本なかった。 国に仕えていたから…

戦争で負傷したバーフィット大佐が指２本を無くしていたのは、そこだけ見るとその勇敢な戦士だった姿を思い出すこともないかもしれないが、戦場での兵士としての大佐の勇敢さが伝わるような気がする。この戦闘は第

一次世界大戦以前のものである。大佐は「丘をさっそうと上っていた。足が不自由にもかかわらず、かれの接し方はどこか軍隊的なところがあった（He was marching up the hill. In spite of his lameness there was something military in his approach）」(20)。確かにバーフィット大佐には「軍隊を思わせる (military)」雰囲気があると強調されている。バーフィット大佐は自分の体験を言葉で語ることはないが、この大佐の姿は戦争を連想させるものを若いジェイコブに伝えているのではないだろうか。次の手紙の中では自分の「軍隊的な」ものをジェイコブに書き残したかもしれない。

"I will leave you the letter to show Jacob," said the Captain, putting it clumsily back in its envelope(22).

「ジェイコブに見せるために手紙を残しておこう 」と大佐は不器用に手紙を封筒に戻した。

その大佐はジェイコブに手紙を渡そうしている。その手紙には何が書かれているのだろうか。それははっきりとは書きとめられていない。ベティとの会話から推測するとジェイコブに大学に入るように勧める内容かもしれない。その手紙を封筒に入れるしぐさは器用というわけではなかった。

ジェイコブが受け取る「手紙」には何が書き記されていたのだろうか。バーフィット大佐よって書き残こされたメッセージを入れた手紙の封筒はどこにあるのか。それはポケットの中にいれていたのだろうか。果たしてその封筒をポケットの中に入れたかどうかわからない。その封筒がどこにあるのかは明示されていない。バーフィット大佐がそのように言ったかどうかわからないけれども、ジェイコブは１９０６年１０月にケンブリッジ大学に入学している。

さらに「不器用に」手紙を封筒に戻す手の動きを想像すると大佐がジェイコブに対して手紙に言葉を連ねて、ジェイコブがその手紙を読んでなにか解釈したと仮定すると、ジェイコブは戦場で負傷した大佐をどのように思っただろうか。大佐は自分が体験した戦争をどのように感じているのか。暗に意識したかしないかわからないが、もしかするとポケットのなかに大佐の手

紙がはいっていれば、彼の両手は、大佐の手紙を握りしめていたかもしれない。ポケットの中にあれば、それはジェイコブの心境に「戦争的な」ものが映し出されているかもしれない。

> Now Jacob walked over to the window and stood with his hands in his pockets. Mr. Springett opposite came out, looked at his shop window, and went in again. The children drifted past, eyeing the pink sticks of sweetstuff（101）.

さてジェイコブは窓の方に歩いて行き、ポケットに両手を入れたまま立っていた。向かいのスプリングネットさんが出てきて、店の窓を見て、また入っていった。子供たちは、ピンク色の棒状のスウィーツを見ながら通り過ぎていった。

この場面でジェイコブが屋外に出ていて、寒さをしのぐために反射的にポケットに手を入れたのかもしれない。外からファニー・エルマーをモデルにして、画家のニックが粘土を親指で形を作っている様子をジェイコブが目撃したのかもしれないが、その芸術家の指の動きを感じてジェイコブが自分の手を意識したかもしれない。ただジェイコブが自分の両手をポケットの中にいれている、その様子はある意味をほのめかす。それは知らず知らずのうちに「ポケット」のなかの危なげない安心感のようなものにつながっているのではないだろうか。

> Jacob went to the window and stood with his hands in his pockets. There he saw three Greeks in kilts; the masts of ships; idle or busy people of the lower classes strolling or stepping out briskly, or falling into groups and gesticulating with their hands. Their lack of concern for him was not the cause of his gloom; but some more profound conviction--it was not that he himself happened to be lonely, but that all people are（123）.

ジェイコブは窓の方へ行き、ポケットに両手を突っ込んだまま立った。そ

こにはキルトを着た三人のギリシア人がいた。船のマストが見えたが、下層階級の怠惰な、あるいは忙しい人々が散歩をしたり、急に出て行ったり、集団になったり、両手をつかって身振り手振りしているのが見えた。ひとびとが自分に無関心だったのは、彼自身がたまたま憂鬱だったのではなく、すべての人が孤独であるという深い確信だった。

ここでもジェイコブはポケットのなか（in his pockets）に両手を入れている。ギリシアで自分が知るよう人もいない異国にいる。英国では安心してそこで安住できると感じるが、ギリシアでは不安な気持ちが否定できない。自分に対する不安感が高まりを見せているのではないか。その気持ちの不安を伝えているのが、自分の手をポケットのなかに入れている彼独特のポーズと見られないだろうか。ポケットの外にいれば、自分の危険や不安、孤独が徐々に自分に押し寄せてくる。自分の無力感からうまれる憂鬱な感情を和らげてくれるかもしれない。

> He was sarcastic because of Clara Durrant; because Jacob had come back from Greece very brown and lean, with his pockets full of Greek notes, which he pulled out when the chair man came for pence; because Jacob was silent（144）.

彼が皮肉を言ったのはクララ・デュラントのせいで、ジェイコブがギリシアから戻ってきたときには、日焼けして痩せていて、ポケットいっぱいのギリシア紙幣を持っていたからです。椅子の男が１ペンスを取りに来た時にその紙幣を取り出した。かれは沈黙していたから。

あるときにはポケットのなかに「ギリシア紙幣」が詰め込まれている。ジェイコブは財布などを持ち合わせていないのかもしれない。「ギリシア紙幣」もそれなりに彼にとって不要なものではないだろう。しわくちゃの手紙と同様に「ギリシア紙幣」もポケットのなかで守られるものかもしれない。ポケットのなかの空間は危なげないもの、安全なもの、保護されるもの、外部の干渉から遠ざかるものであり、価値あるものを損なうことを防止してく

れる。ポケットのなかの空間でジェイコブは無防備なお札を保護しているのである。何がポケットの中にあるのかを振り返ると、手紙であったり、紙幣であったり、パイプであったり、日記（手帳）であったりする。それらはどれも個人的なものであり、個人的に意味を持つものであるといえるだろう。ポケットのなかの空間は安全な空間であり、無防備に曝されるのを避ける場所である。ポケットの中のものは保護されるべきもの、外部の干渉から遠ざかるものであり、価値あるものを損なうことを防止してくれる。ちなみに「pocket」とは軍事用語で「孤立地帯」、「包囲された小地域」という分割された空間を意味している。ポケットのなかの空間でジェイコブは無防備なお札を保護しているのである。

７．ポケットの中の空間

このポケットとは単なる衣服の一部であるが、なにかを意味しているのではないだろうか。小さくてコンパクトなポケットの空間は、外部からの暴力を防いて守りぬく安心させるような空間である。エミリー・ジェームズとレイチェル・M・ブッセによれば、コンパクトなポケットは戦場で戦う兵士たちに実践的に意味があるといわれる[(7)]。ポケットのなかで手紙を小さく折りたたんで持ち歩けるはずである。ポール・フィッセルは兵士で不安な気持ちから家族に戦地の厳しい現実を手紙に書いて出した兵士はほとんどいなかったと指摘する。戦場の兵士は特別である。戦場記者やカメラマンは事実を伝えることは許されていても、もし手紙に真実を書けば、家族とつながる手紙のすべてが検閲されて、彼らの手元の届けられずに破棄されてしまった[(8)]。そうした外部からの検閲から手紙を小さくたたんで隠し持つことができる。それは自分の身体と生命を支えて守る空間にもなると考えられるかもしれない。戦場にはさまざまな暴力が行きかう。軍隊の権力者による検閲から逃れるすべをポケットの中の空間が教えてくれる。この小さな空間は、ある意味で無防備な兵士の精神を不安や死の危険のトラウマから象徴的に緩和して、遠ざけてくれる。それは戦争の暴力を回避して見えない空間による支えになっているかもしれない。ここまでは衣服の「ポケット」を見てきたが、次にもうひとつの「ポケット」を見てみよう。それはあたかもジェイコブの身

体を代用するような「手帳（pocket-book）」の存在である。

（`What's happening on Saturday?`）
Then, taking out his pocket-book, he assured himself that the night of the Durrants' party came next week.

But though all this may very well be true--so Jacob thought and spoke--so he crossed his legs--filled his pipe--sipped his whisky, andonce looked at his pocket-book, rumpling his hair as he did so, there remains over something which can never be conveyed to a second person save by Jacob himself. Moreover, part of this is not Jacob but Richard Bonamy--the room; the market carts; the hour; the very moment of history(60-61).

（「土曜日にはなにがあったのだろう」）
そして、手帳を取り出して、その夜のことを確かめた。
デュラント家のパーティーが来週にやってくることになった。しかし、これらのことはすべて真実であるかもしれないが、ジェイコブは考えた。そうして彼は足を組んで、パイプを入れて、ウィスキーを一口飲んで、そうしながら髪をなびかせながら手帳を見たら、ジェイコブ自身以外の二人目の人間には決して伝えられない何かが残っている。さらに、その一部はジェイコブではなく、リチャード・ボナミーである -- 部屋、市場の荷車、時間、歴史の瞬間 (60-61)。

ジェイコブが「手帳 (pocket-book)」を取り出してそのなかに書き残したことを確認するように「手帳」を見る。土曜日の予定を「手帳」の中に探す。日記によく似ているかもしれないが、手帳には自分だけの秘密が書かれている。それをどこから取り出したかは書かれていない。推測すれば、もしかすると身体のどこかの「ポケット」のなかから取り出したとみることもできるだろう。「手帳」はジェイコブにはそれなりに重要なことが含まれているのは確かである。とはいえ、２２歳のジェイコブがいきなり危険に直面するわけではない。しかしながら、読者はジェイコブの運命をうすうす気が付い

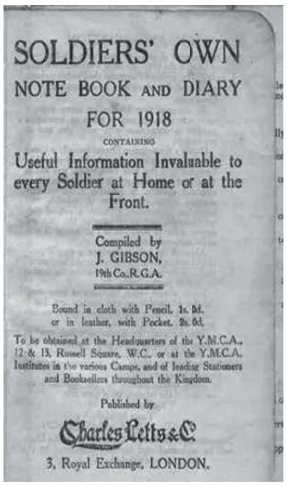
ているのも事実である。だから特にイギリス英語では「手帳」の意味が強い。「pocket-book」という独特の名称が先に見たように「ポケット」なるものとはどこかで持ち主の無力な身体を守るような象徴的なものであろう。それは「不安や死の危険のトラウマから象徴的に緩和して、遠ざけてくれる」かのような簡潔な日記や手紙に近いかもしれない。「ポケット・ブック」とは身近なものであり、プライベートな空間でもある。身近な自分の生命を守り、保護してくれる「ポケット」空間の安らぎを示唆しているのではないだろうか。その空間の外部には、すぐそこに生命の危険が迫ってきている予感が感じられるからである。

8. 英国レッツ社製「ポケット・ブック」の登場

「手帳」というと、『ジェイコブの部屋』の中ではクララが日記に「ジェイコブのことが好き」と書き残す。その日記とは「レッツ氏（Mr. Letts）」の日記帳を指している。この「レッツ氏の日記（Mr. Letts Diary）」とはこの時代を代表するレッツ・ブランドの日記帳である。母親のベティもこのレッツ手帳を使っている（[She] wrote in Mr. Letts's diary how the weather was fine）（71）。ウルフがこういうブランド名を小説の中にいれるのは少しばかり珍しいといわれる。ペンギン版『ジェイコブの部屋』の注釈を入れたスーエ・ロー（Sue・Roe）は、この部分に見解を加えている。ローにはクレアが自分の（ジェイコブへの）思いをあれこれと書き込みたいと思ったにもかかわらず、書き込む余白部分がこの日記帳にはほとんどない。それほどこの日記帳が小さな商品であるという。ウルフが冗談で、ポケットサイズの小さな日記を作った流行の印刷屋を擬人化したと説明を加えている[(9)]。

このポケットサイズのレッツ日記とは何か。それは1816年に創設の英国の製本業ジョン・レッツによって考案された。ジャーナルとカレンダーを組み合わせることで、個人の履歴を記録する方法を一変させた。レッツ氏はユニークなアクセサリーを考案し、世界初の商業用日誌を発明して出版した。このレッツのポケット・ダイアリーはヴィクトリア朝のイギリスで人気を集めた。レッツ社は150種類以上のダイアリーを作った。そのなかで英国の中流家庭で多く使われたのがこのポケットダイアリーであった。日記には兵士

の日常活動を助けるために設計された印刷された重要な情報が含まれており、巻末はヨーロッパの戦争地域の地図がつけられた。


SOLDIERS' OWN
NOTE BOOK AND DIARY
FOR 1918
CONTAINING
Useful Information Invaluable to every Soldier at Home or at the Front.

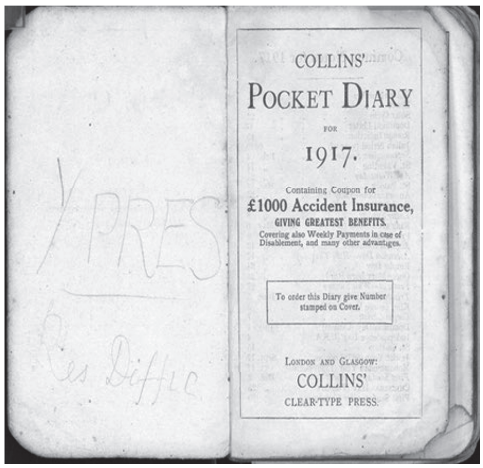
Compiled by
J. GIBSON,
19th Co., R.G.A.

Bound in cloth with Pencil, 1s. 6d.
or in leather, with Pocket, 2s. 6d.
To be obtained at the Headquarters of the Y.M.C.A., 12 & 13, Russell Square, W.C., or at the Y.M.C.A. Institutes in the various Camps, and of leading Stationers and Booksellers throughout the Kingdom.

Published by
Charles Letts & Co.
3, Royal Exchange, LONDON.

レッツ社で発売された兵士のポケットダイアリー(10)

1895年レッツ社はこのポケットダイアリーに「損害事故クーポン」を導入した。この損害保険クーポンとは鉄道、路面電車、自動車、タクシーなどで死亡事故が発生したときその損害を補償するものであった。この事故保険は１９世紀後半から２０世紀初頭にかけて人々の間で関心が高まった。現代のリスクを回避するために発明された「ポケット・ダイアリー」だったといえる。


COLLINS'
POCKET DIARY
FOR
1917.
Containing Coupon for
£1000 Accident Insurance,
GIVING GREATEST BENEFITS.
Covering also Weekly Payments in case of Disablement, and many other advantages.

To order this Diary give Number stamped on Cover.

LONDON AND GLASGOW:
COLLINS'
CLEAR-TYPE PRESS.

コリンズ社のポケットダイアリー、傷害保険（Accident Insurance）がつけられている。(11)

レッツは２０世紀の多くの危険から人々を守るあるいは身の危険の脅威を緩和する象徴的な役割も果たしている。加えて、戦争の危機に人々の生命を保証した。この手帳には怪我をしたときの応急処置や英語以外の言語で救助を求める外国のアドバイスなども掲載されている。その点でこのコンパクト手帳の役割は毎日の出来事を書き残すだけではなく、前線で活躍する兵士たちにも人気があった。兵士だけでなく、人々の健康や事故の損害などを保証してくれる今までにない新しい価値が付け加えられていた。(12)

９．クララも愛用する「ポケット・ブック」の魅力

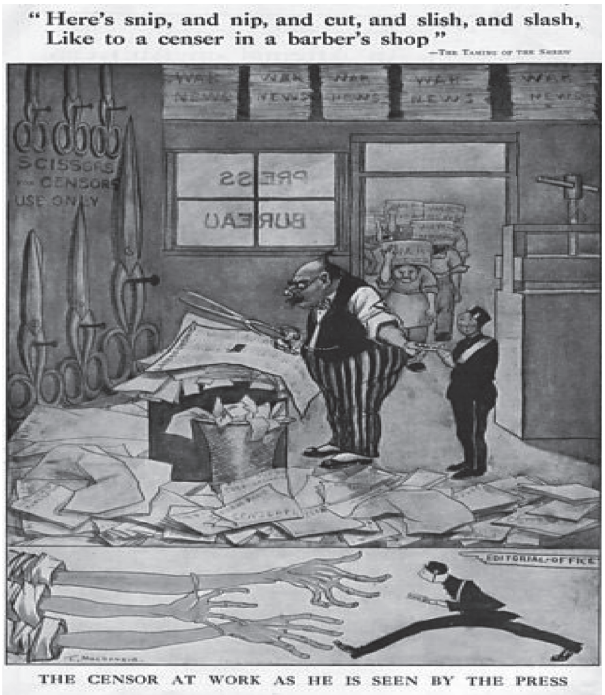
このポケット・ダイアリーを愛用するのが、クララである。小さくて書き込む空間が狭くたくさんの文章などは書ききれない一見不便なダイアリーである。

"I like Jacob Flanders," wrote Clara Durrant in her diary. "He is so unworldly. He gives himself no airs, and one can say what one likes to him, though he's frightening because ..." But Mr. Letts allows little space in his shilling diaries. Clara was not the one to encroach upon Wednesday. Humblest, most candid of women! "No, no, no," she sighed, standing at the greenhouse door, "don't break--don't spoil"--what? Something infinitely wonderful (59).

「私はジェイコブ・フランダースが好きです 」とクララ・デュラントは日記に書いた。「彼はとても世間知らずで「彼は気取った態度を取らず 好きなことを言える」「彼は驚かせるようなひとだけど ....」しかし、レッツ氏の日記にほとんど字を書くスペースがなかった。クララは水曜日には邪魔する人間ではない。最も謙虚で率直な女性だ！「ちがう、ちがう、」と彼女はため息をついて温室のドアの前に立っていた「壊さないで、台無しにしないで」-何を？
無限に素晴らしい何かを

クララは一般市民である。戦場にいる兵士とは温度差がかなりある。自分の日記帳には、自分のストレートな気持ちを書き記すのが自然であろう。まだ戦場に入っていないジェイコブである。これからかれは兵士になるであろう。その点を考えるとこの日記の時代とまったく異なる戦時下の空気のなかに突入することになるだろう。対照的にクララはこのポケット日記に自分がジェイコブのことを想って正直に気持ちを書いているように思える。クララには自分の日記が他者によって読み解かれる恐れはなかっただろう。一方兵士候補であるジェイコブにはこのようなプライバシーが守られる保証はない。

ポール・ファッセルは英国の兵士が手紙や日記で使う言葉に着目している。戦争の現実を証言するときに実際の現場の様子を直接的な表現で家族や友人に伝えることはできなかった。したがって兵士たちは軍隊の定める定型表現のなかで言葉の使い方に慎重にならざるを得なかった。それはつまり自分の正直な意見や考えではなく硬直化した修辞形式の中で別の表現様式に偽装された。



新聞の検閲が行われた。検閲は軍隊の動きを秘密に保つために導入された。(13)

兵士が「婉曲法（euphemism）」を使い、手紙のなかで戦火の様子を家族に伝えた。「英国にとって戦争は専門用語と言葉の繊細さの中で始まり、言語と文学を巧みに使ったように厳格で難解な婉曲表現の雰囲気の中で進行した」。(14) 日常的な文章でさえ、兵士だけでなく、一般市民でも表現を豊かに現実的な悲惨さを描写するのを回避する修辞的な操作が密やかに進んでいた。要は個人の手紙を検閲である。ジェイコブもそういう社会の雰囲気を意識しているかのように「デイリー・メイル」紙を読みながら、世間体や人々が正装するイヴニング・パーティー、レイズ・インの裏のスラム街などを思い出して「大英帝国に疑問を抱くようになった」と12章で検閲の圧力を間接的につぶやいている。

ジェイコブは自分のポケット手帳（日記）には、「部屋、市場の荷車、時間、歴史の瞬間」と書き入れている。その内容は同じ手帳であるが、ジェイコブが書き残こす内容とクララがそこに書いたジェイコブの人柄に迫る鋭い分析と比べると、ジェイコブが残した日記の内容は、誰が読んでもどうでもよい単語をただ並べただけの書きなぐりのように見える。それは確かで、ジェイコブが戦争に入る前の嵐の前のヨーロッパを目前にした緊張感に包まれていたわけではないと解釈できるだろう。しかしある時点で象徴的にはジェイコブは、兵士のなることを運命づけられていたとも読める。戦争の始まりも終わりも明確にはわからないが、現実的には明確に説明されているわけでない。そうはいっても、この小説の後半で戦争が始まったのは確かである。ジェイコブは手紙とは「崇高で、限りなく勇敢であり、孤独であり、失われたもの」であり、手紙がなければ、人生がばらばらに引き裂かれると述べている（79）。母親のベティには必ずしもすべてをしらせているわけではない（「フランダース夫人には何も言われなかったが、ジェイコブは世界でこれほど重要なものはないと感じていた」）といわれるが、手紙の中には自分のことは隠さずに書いている。

Jacob had nothing to hide from his mother. It was only that he could make no sense himself of his extraordinary excitement, and as for writing it down---

“Jacob's letters are so like him," said Mrs. Jarvis, folding the sheet.

“Indeed he seems to be having ..." said Mrs. Flanders, and paused, for she was cutting out a dress and had to straighten the pattern, “... a very gay time." (114)

ジェイコブは母親に隠すことは何もありませんでした ただ彼は自分の異常な興奮を 理解できなかった。

それを書き留めた。

「ジェイコブの手紙は彼らしい」とジャービス夫人は便せんを折りたたんで言った。

「確かにジェイコブは ... 」とフランダース夫人は言って、彼女はドレスを切り抜いていたので、一時停止し、パターンをまっすぐにしなければならなかった、「... 非常に陽気な時間を送っているようね」。

ジェイコブは母親ベティに自分の気持ちを「彼らしく」伝えたのはわかる。ベティとジェイコブの親子の間では手紙は自分のことを隠さずに書かれていた。ではいったいジェイコブは何を書いたのかは、あえて書かれていない。ただ、ジェイコブが楽しそうな時間を送ったのは、ベティにはつたわっているようである。手紙は本来、プライベートなものであり、他人が読むのを前提に書いているわけでないはずである。

手紙を日記に読み替えて考えると日記の中にも、クララが正直に語った言葉が「崇高で、限りなく勇敢であり、孤独であり、失われたもの」というべき内容で、それは真剣につづられた言葉である。一方でジェイコブは自分の悲しみや不安を言葉にできなかったのかは明確にはわからないまま、戦場に姿を消して、ジェイコブの部屋に戻ることはなかった。そこでこの小説の最後の場面でポイントとなる「手紙」の存在が前面に登場する。ジェイコブのいないジェイコブの部屋には、「手紙は全部誰にでも読めるように散らばっている（All his letters strewn about for any one to read)」（155）。無防備に放置されたままその手紙にはいったい何が書かれていたのか。果たして彼の本当の気持ちが記されていたのだろうか。ジェイコブは、戦場に専念した。自分が何を感じてどう思ったのか、クララの日記のように書き残したいはずだろう。そういう気持ちを抑えるのは不自然であろう。ジェイコブは母親に

自分の無事を伝えたのだろうか。ポール・ファッセルによれば第一次世界大戦の際に戦地勤務の兵士に特別なはがき（field service post card）が利用されたといわれる。[15] 現役の兵士が上官による検閲を必要とせずに迅速なメッセージを家に送るために使用された。彼らの目的は、彼らが生きていて元気であることを彼らの愛する人に安心させ、家からの手紙や小包が前線に届いているのが確認できた。兵士は、事前に印刷された文章の選択から必要に応じて削除することが許可された。日付と署名以外のものが追加された場合、カードは破棄された。したがってこの戦地勤務のはがきが、家族や友人を不安にさせないような文章が決まり文句で塗替えたかのような内容であった。

フィールドサービスポストカードは、彼らの将校による検閲を必要とせずに
家に迅速なメッセージを送信するために現役の兵士によって使用された。[16]

兵士であるためには、「手紙に真実を書けば、家族とつながる手紙のすべてが検閲されて、彼らの手元の届けられずに破棄される」という理由が思い起こされる。最後のジェイコブの部屋に残された手紙はどういう手紙だったのだろうか。前線から送られた決まり文句ばかりのことばを連ねた手紙だったのだろうか。戦時中の「はがき」のように、送信者の日付と署名以外は何も書いてはいけないと思われる手紙だったのか。だれもいない部屋の中で何も整理されないままで、ジェイコブの手紙は置き去りにされている。ジェイコブの分身であるかのような存在が彼の書き残した手紙（日記）であるかのように見えてくる。

「手紙」と「日記」とは戦争の修辞的なスタイルを無意識のうちに反映させている。「西部戦線異状なし」とはまさに戦争のトラウマをなんとか回避しようするメッセージにほかならない。戦場の悲惨な塹壕戦でどれだけの若

者が言葉で表現できないような地獄のような場で野垂死にしている。その悲劇の強烈さを弱めて、恐ろしい現実の代りに戦略的に楽観的な修辞的スタイルを選択することで平和な戦争を演出している。

１０. 隠蔽される第一次世界大戦のリアル

第一次世界大戦は大陸を荒廃させ、約 1,000 万人の兵士と 700 万人の民間人が犠牲になった。そこで、作家たちは、彼らと世界の他の国々が戦争の激変に取り組んだとき、深遠で画期的な作品で表現した。第一次世界大戦は科学技術の転換点を示すような初めての戦いであったといわれるが、歴史家サミュエル・ヘインズが論じるように、歴史上初めて、自宅にいる一般市民が戦争を見ることができたのである。印刷技術の加速化により、新聞に写真を掲載することが可能になり、イギリスのどの家庭にもリアルな写真が届くようになったのである。しかし、死体や実際の戦闘シーンの写真を撮ることは禁じられていたし、1916 年から始まった英国国土防衛法（the Defense of the Realm Act）の改正は、いかなる芸術形態でも戦争に反対したり、戦争を批判したりする表現は犯罪行為とみなされた。当時の映画製作で、「ゾンメの戦い」という戦争映画が作られた。この映画の中で、最も有名なシーンは、一人の兵士が塹壕の中に滑り落ち、その間に仲間が上から上へと続き、人のいない土地へ落ちていく。 しかし、この死は映画の中で本物ではないシーンの一つである。映画監督はそれを演出したのである。その演出は、民間人がどれだけ見ることを許されていたかを如実に物語っている。ここには血も傷もなく、ただ静かに下に向かって滑っているだけだ。この劇場の作品は民間人のために演出されたものであり、このように戦争の中で最も広く、深く記憶に残るイメージの一つである「死体」を描き出しているとヘインズは指摘する。(17) この戦争は 40 万人以上が犠牲になった。少なくとも第一次世界大戦では、軍隊は銃剣をライフルに固定した状態で敵対する軍隊の間の領域である「人のいない土地」を登ることによって、塹壕から攻撃を仕掛けた。当然のことながら、このアプローチはほとんど効果的な作戦とはならず、無策に近い戦闘であったため大量の死傷者を生み出してしまう結果に至った。ドイツ軍はすぐに、高度な訓練を受けた兵士を派遣して敵軍の塹壕を攻撃し、

敵の戦線の背後に効果的に侵入した。塹壕戦の残忍さは、おそらく 1916 年のフランスのソンムの戦いに最もよく表れているといわれる。

塹壕の戦を象徴する「ソンムの戦い」のドキュメント映画のシーン(18)

英国軍は 1916 年 7 月 1 日の初日の終わりまでに、57,470 人の死傷者を出し、そのうち 19,240 人が死亡した。これは、1 日で英国軍が被った最大の損失を表していた。そこで英国政府が戦時中の検閲を利用して戦場の死体を一掃した。戦闘にむかう兵士の経験と戦争に対する民間人の認識との間の断絶は、深くなった。この戦争では多くの若い民間人が招集された。十分な訓練を受けないまま戦地で簡単にドイツ軍の犠牲になったといわれる。現実にあまりに多くの兵士が戦死したにもかかわらず、第一次世界大戦の英国で兵士の犠牲を伝えようとする動きは , 遠く避けられている。それは戦争の醜い現実を美しい戦いだったという印象の操作だったともいえる。手帳や手紙の簡素なスタイルには正義のために勇敢に戦う自国を守り通す美しい若者の姿が映し出される。しかし同時にすべては検閲官の視線のなかで映し出されるフェイクな世界でしかなかった。

１１．戦没者を追悼する記念碑のなぐさめ

さて 1922 年出版の『ジェイコブの部屋』の後、ウァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』(1925) では戦後の英国が舞台になる。第一次世界大戦から 5 年後の 1923 年 6 月のある水曜日に設定されている。ポスト大戦の英国社会の一

部が見てとれる。ダロウェイ夫人は「戦争は終わった」と独り言を言っているのが印象的である。戦争の後遺症が「戦争が終わった」の台詞とは反対に人々の精神に暗い影を落としているのがわかる。30歳のセプティマス・ウォレン・スミスは大戦に参加する。戦いの中で功績をあげて将校のエヴァンスから信頼を得て昇級するに至るが、エヴァンスが自分の目のまえで戦火の砲弾を浴びた。その光景がセプティマスを変えてしまう。第一次世界大戦による弾丸衝撃神経症をわずらう。セプティマスは可憐な妻とは対照的に戦後の妄想に悩み苦しんでいる。セプティマスが診察を受けた有名な精神分析医がダロウェイ夫人の夜会に来た時に、セプティマスの突然の自殺を打ち明ける。その知らせを聞いた夫人は深い感銘を受ける。かれは精神の不安と幻覚を詩的な表現を使って書き残している。そのセプティマスの精神の不調は、ヴァージニア・ウルフが第一次世界大戦時の不安や恐怖心から経験した精神の不調と重なり合う。作家として政府から表現についての検閲を経験したわけではないが、表現についての検閲には絶えず敏感に意識していたといわれる。主にホガーズ・プレスとしての出版物についての懸念であった。表現したものを外部の戦争からの妨害から守る必要は感じていた。とりわけウルフは日記や手紙を書くのにたいへん熱心であった点はよく知られている。

ヴァージニア・ウルフ本人（左）とヴァージニア・ウルフを演じるニコール・キッドマン(19)

『ジェイコブの部屋』を書くきっかけは、若くして兄トビー（Thoby）が病気で亡くなったことに由来するといわれるが、人間にとっての突然の死という永遠の主題がそこにはあったのかもしれない。ジェイコブは戦争で帰らぬひとになった。その結末でこの小説はより多くの反響を呼ぶことになった。かれの死は、まったく説明されないのにはヴァージニア・ウルフ独特の主張があるはずである。ベティは遠くから聞こえてくる音がもしかすると大砲のものかもしれないと予感する。もしかすると、自分の息子になにかが起こっているのかもしれないと危惧する。

"The guns?" said Betty Flanders, half asleep, getting out of bed and going to the window, which was decorated with a fringe of dark leaves.

"Not at this distance," she thought. "It is the sea."

Again, far away, she heard the dull sound, as if nocturnal women were beating great carpets. There was Morty lost, and Seabrook dead; her sons fighting for their country. But were the chickens safe? Was that someone moving downstairs? Rebecca with the toothache? No. The nocturnal women were beating great carpets. Her hens shifted slightly on their perches(154).

「大砲？」とベティ・フランダースは言った 半分眠っていてベッドから出てきて暗い葉っぱの縁取りで飾られた 窓の方へ行きました

「この距離では大砲の音は聞こえてこない」と彼女は思った。「海の音だ」と。

またもや遠くで、彼女は鈍い音を聞いた。

夜の女たちが絨毯を叩いているかのように。 モーティは行方不明になり、シーブルックは死んだ 彼女の息子たちは国のために戦っていた しかし、ひよっこの若い人々は無事だったのか？それは ... 下の階でひとが動く音？歯痛のレベッカ？ちがう。 夜の女たちは大きな絨毯を叩いているところ。 彼女の雌鶏は、止まり木の上でわずかに動いた。

若い兵士が戦争のために戦っていた。そして彼らが命を落とし犠牲になった。国家は若い男性を戦争に行かせる。それは自国を守るのが男性の義務だからである。夫のシーブルックも亡くなった。兵士の手紙や日記には検閲が行われる。「夜の女」たちは社会から排除されて女性は「純潔」を失うことなく、それを大切に守ることが戦争である。若い兵士は塹壕戦で非業の死を遂げる。だれも戦争の現実を伝えることができない。どこかで彼らは犠牲になり、行方不明のままで姿が見えなくなる。そういう戦争の在り方は、実は戦いなど起こっていなかったかのような別の現実に私たちを連れ去る。大砲の音が聞こえていたとしてもそれは「海の音」あるいは「夜の女が絨毯をたたく」音に置き換えられている。どこかに戦争の悲惨な現実は家族や母親に伝えられない。複雑で悲惨な戦場の音は消え去り、誰も「大砲」の音を聞くことできない。「海」の音や「階下のひと」の音にしか聞こえない。ヴァージニア・ウルフは「大砲の音」が遮断された美しい平和な世界をあぶり出そうと試みている。こうした動きに対応するように戦後無名戦士を称賛する記念碑や荘厳な慰霊碑が数多く国内外に作られるようになった。アリソン・ブースは第一次世界大戦の後に戦死者の記念碑が数多く作られるようになった経緯を語っている。[20] 数多くの若い犠牲者を結果的に引き起こした戦闘にもかかわらず犠牲者の遺体は見つけられたにもかかわらず、政府の指示で英国に運び込まれなかった。犠牲者の写真も流通しないように止められていた。美しい記念碑の中で語り継がれるヒロイズムは多くの国民を勇気づける。遺体なき遺体に敬意を示すために英国では無名戦士のための記念碑が作られていた。

ザ・セノタフ（The Cenotaph）イギリス・ロンドンのホワイトホールにある戦争記念施設。
1920 年に常設の建造物に置き換えられ、イギリスの公式戦争記念碑に指定された。[21]

戦争の悲劇は、戦士たちの勇敢さや戦いの理想などの抽象的な表現に置きかえられる傾向をアリソン・ブースは指摘する。勇敢な兵士の死は、決して悲劇的なことばでは語られないのである。最初に『ジェイコブの部屋』を読んだ読者は最後のページに至ってもジェイコブの消息がわからないまま物語を終える。どうしてジェイコブが消えてしまったのか。どうしてみえないのか。主人公は何かの理由で裏にひそんでいるかもしれない。どこかで聞こえる砲弾の音。ところが砲弾の音に関係なく生き延びたジェイコブは自分の部屋に戻ったのだろうか。それはジェイコブが突然の行方不明者のようにこの世界から消し去る目的ではなかったのか。流血も死体もなかったかのように隠されてかれの姿を見失った。打ちのめされて醜いものがあるはずなのに全く見えない。それは悲惨な戦争の現実を否定する。これは美しい戦争であり、ヒロイズムの言説となるだろう。無名戦士のジェイコブを過剰に演出すればそれは記念碑や墓石の楽観主義につながっていく。だれもがそれを見て安堵感を覚える。このようにこの小説を振り返ってみると、ヴァージニア・ウルフが作り上げたこの美しい文学的な表層のもとに見てはいけない隠蔽された第一次世界大戦の生々しい現実が浮かび上がる。(22)その現実の深層にむかってそれを垣間見なければいけない。それでなければジェイコブの本当の姿はみえてこないのである。

注

使用したテキストは、Woolf, Virginia. *Jacob's Room*.1922. London: Penguin Books,1992 引用の英語の括弧は同書の頁である。日本語は拙訳による。

（１）Tammy Clewell, p.208. ウルフは戦前の男らしさの解釈が喪失への道を用意したかを示すために男性主人公へフェミニスト的な怒りを見せているという。浜辺で運んできたカニを死ぬまで放置したのは若いジェイコブの残虐さを浮き彫りする。攻撃的な敵意をつかってウルフはジェイコブと戦っている。ウルフは従順で受け身の喪主という伝統的な役割を受け入れない。Linda Martin はジェイコブに関して、喪失感が読者に重くのしかかるという。かれが目のまえで生きていたにもかかわらず存在しない点を強調する。このような独特の欠落や空虚感を具体的に探究したのがこの小説であると指摘。心理学、認知科学などの概念を使い、ジェイコブの未知なるこころを探る試みを見せている。

（２）Allyson Booth, pp.46-49. ジェイコブの「形」に焦点を当てている。その「形」に対して「内容」を欠いた彼の姿こそ肉体を欠いた死者のメタファーを暗示すると見ている。この形を欠いたジェイコブの身体は、第一次世界大戦での名もなき若い犠牲者との比較を行っている。

（３）ジェイコブの部屋を連想させるこの小説『ジェイコブの部屋』の表紙
(https://encryptedtbn0.gstatic.com/images?q=tbn:ANd9GcRz8I4uNtoWPbZmxfYTdAD9X5I-3s0xg__ZtQ&usqp=CAU)

（４）秋山義典　pp.149-154. モダニストとしてのヴァージニア・ウルフがモダニスト的な教養小説を完成させた。従来の教養小説とのちがいを大英帝国との関係から議論した。

（５）「英国国土保護法」の写真
(https://www.nationalarchives.gov.uk/education/britain1906to1918/g7/cs1/images/g7cs1s10.jpg)

（６）Celia Marshik, pp.103-112.

（７）Emily James with Rachel M. Busse, pp.8-10.

（８）Paul Fussell, p.95.

（９）Sue Roe, p.169.

（10）レッツ社のポケット・ダイアリーの写真
(https://static.wixstatic.com/media/62ffff_0530370de1734b29b8713b0d6cc3c14b.jpg/v1/fill/w_375,h_549,al_c,lg_1,q_80/62ffff_0530370de1734b29b8713b0d6cc3c14b.webp)

（11）コリンズ社のポケット・ダイアリーの写真
(http://ww1lit.nsms.ox.ac.uk/ww1lit/files/original/ce3c9aeb3f6f008cd34f17678bce5bc7.jpg)

（12）Emily James with Rachel M. Busse, pp.10-15. ジェイコブは安全、保護などを可能にしてくれる物質的、修辞的なかたちを求めていた。断片をまとめるかたちである。子どものときに動物の骨格（哺乳類の骨）や甲殻類の貝殻がかれを補強してくれた。これはお守りのようなものだった。その延長に手紙や日記を置いて考察する。手紙は兵士の身体の代用品であり、家に帰ることができない兵士を暗示するという。手帳に付け加えられた事故保険は１９世紀後半から２０世紀初頭に人気の商品で、リスクの多い世界の危険を緩和して未知の恐ろしい脅威の衝撃を和らげる役割を果たしている。

（13）新聞を検閲する風刺画（https://ichef.bbci.co.uk/images/ic/320xn/p01v1jrh.jpg）

（14）Paul Fussell, pp.194-203.

（15）Paul Fussell, p.199.

（16）フィールドサービスの写真
（http://www.worldwar1luton.com/tags/censors）軍隊の目的は、自らが健在であることを自らの愛する人を安心させ、自宅からの手紙や小包が戦線に通っていることを確認した。兵士は、事前に印刷された文章の選択から必要に応じて書いた。日付と署名以外のものが追加された場合、カードは破棄された。

（17）Samuel Hynes, pp.120-131

(18)「ソンムの戦い」の写真
（https://media.iwm.org.uk/loris/7/965/super_000000.jpg/full/865,/0/default.jpg）
(19) ヴァージニア・ウルフとヴァージニア・ウルフを演じるニコール・キッドマンの写真
（https://www.researchgate.net/publication/339855511/figure/fig5/AS:868076853673996@1583977058910/Virginia-Woolf-Nicole-Kidman-in-The-Hours-comparison-Hulton-Archive-Getty-Paramount.png）
(20) Allyson Booth, pp.22-45.
(21) ザ・セノタフ（The Cenotaph）イギリス・ロンドンのホワイトホールにある戦争記念施設。
（https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/6/68/Wreaths_Are_Laid_at_the_Cenotaph%2C_London_During_Remembrance_Sunday_Service_MOD_45152052.jpg/300pxWreaths_Are_Laid_at_the_Cenotaph%2C_London_During_Remembrance_Sunday_Service_MOD_45152052.jpg）
(22) Tammy Clewell, pp.199-209. 芸術が慰めや贖罪の目的を果せない。あらゆる慰めには効果がないことが語られる。戦争と追悼の観点からウルフが反慰めの実践を行っている。Kathleen Wall と Linda Martin の両者も追悼や喪失について議論を行っている。Kathleen Wall は戦争体験が個人の内面や人生にどのような影響を与えるのかを定期する。ウルフが戦後の悲しみの経験を具現化する芸術のかたちを追求したと話す。さらに Linda Martin はこころの理論や認知的な物語の概念を利用してジェイコブの知られざるこころをいかに構築したのかを分析する。読者は物語の空白を埋めるように構造的な知識を認知的に呼びだして予測や推論を行う。バーフィット大佐へのベティの気持ち、ジェイコブの部屋で荷物を詰め込む彼女の冷静さなどからベティのアイデンティティの一貫性した感覚が作り上げられている点を例に挙げている。英国の教育、政治、社会制度への批判と同時に戦争の犠牲者の死別と悲しみの表現に着目している。

参考文献

Booth, Allyson. *Postcards from The Trenches*, New York: Oxford University Press, 1996.

Clewell, Tammy. “Consolation Refused: Virginia Woolf, The Great War, and Modernist Mourning,” Modern Fiction Studies, Volume 50, number1, Spring, the Johns Hopkins University Press, 2004, pp.197-223.

Fussell, Paul. *The Great War and Modern Memory*, New York: Oxford University Press, 1975.

Hynes, Samuel. *A War Imagined*, New York: Atheneum, Macmillan Publishing Company, 1991.

James, Emily with Busse, Rachel M.. “The Forms of War: Pocket Diaries and Post Cards in *Jacob’s Room*,” Journal of Modern Literature Vol.42, No.1, 2018, Indiana University, pp.1-18.

Marshik, Celia. *British Modernism and Censorship*, New York: Cambridge University Press, 2006.

Martin, Linda. “Elegy and The Unknowable Mind in *Jacob’s Room*,” Studies in the Novel Vol. 46 No. 2 (Summer), 2015, the Johns Hopkins University and the University of North Texas, pp.176-192.

Roe, Sue. “Introduction and Notes,” in *Jacob’s Room*.1922. London: Penguin Books,1992.

Wall, Kathleen. “Significant Form in *Jacob’s Room*: Ekphrasis and the Elegy,” Texas Studies in Literature and Language, Vol.44, No. 3, Fall 2002, the University of Texas Press, pp.303-317.

秋山義典「大英帝国を反転させるモダニズムの教養小説―ヴァージニア・ウルフ『ジェイコブの部屋』」東京都市大学共通教育部紀要、2015 Vol.8, pp.149-154.

ヴァージニア・ウルフ　ヴァージニア・ウルフ著作集２『ジェイコブの部屋』出淵敬子訳　みすず書房、1989 年

ヴァージニア・ウルフ　『ダロウェイ夫人』丹治愛訳 集英社、2007 年